



UP 選書



UP選書

国家独占資本主義

大 内 力

東京大学出版会

著 者 略 歴

1918 年 東京に生れる
 42 年 東京大学経済学部卒業
 47 年 東京大学助教授(社会科学研究所)
 57 年 同 経済学部勤務
 現 在 東京大学教授(経済学部)・経済学博士

主 要 著 書

日本資本主義の農業問題 (改訂版)	日 本 評 論 社 東京大学出版会	1948 1952)
日本農業の論理	日 本 評 論 社	1949
日本農業の財政学	東京大学出版会	1950
農 業 問 題 (改訂版)	岩 波 書 店	1951 1961)
農 業 恐 慌	有 斐 閣	1954
肥料の経済学	法政大学出版局	1957
地代と土地所有	東京大学出版会	1958
農 業 史	東洋経済新報社	1960
日本経済論 上・下	東京大学出版会	1962・63
アメリカ農業論	東京大学出版会	1965
「経済学」批判	日 本 評 論 社	1967
日本における農民層の分解	東京大学出版会	1969
農業経済学序説	時 潮 社	1970

現 住 所

東京都新宿区百人町 3 の 385 (〒 160)



国家独占資本主義

UF選書 62

1970 年 12 月 25 日 初版

定 価 480 円*



© 著 者 おお うち つとむ
 大 内 力
 発 行 者 福 武 直

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話(811)8814 振替東京59964

研究社印刷・新栄社製本

1333-05620-5149

は し が き

は し が き

資本主義が変ったということはここ十数年来くりかえしいわれてきたことであるし、またわれわれが日常的に経験していることでもある。それはもはやマルクスが描きだした資本主義像とはむろんのこと、レーニンのそれとさえ、いちじるしくかけがったものになったようにみえる。しかし、資本主義のどこが、なにゆえ変ったのかということになると、またこの変ったことが、歴史にとつて何をいみしているのかということになると、答えはそう簡単ではない。変った側面をあれやこれやと並べたてること、またそのなかからつごうのいいところだけをとりだしてこれを讚美したり、不つごうなところだけをとりだしてそれをけなしつけることは、別にむずかしいことではないし、すでに汗牛充棟の著書や論文がこころみていることでもある。しかし、それに経済学の理論の光をあてつつ、これを理論体系化することは、けっして容易ではないのである。

もちろんそういうこころみがこれまでなかったというのではない。いわゆる国家独占資本主義論は、いずれもこういう問題意識をもった現実の理論化のこころみであるとみていいし、第二次大戦後、マルクス経済学が内外ともにこの問題にとり組んできたモニュメントは、こんにちすでに多すぎるくらいに沢山のこされている。しかし残念ながら、それらが現実の本質把握に十分成功したとはかならずしもいえそうにない。しかも、現実の複雑多様な諸現象を論理的に整序することに成功

しえていないのみか、そのために不可欠な理論仮説を整然と組立てることさえ、なお摸索の範囲を出ていないというのが現実であろう。

こういういみで国家独占資本主義は、現在もわれわれの研究意欲をそそってやまない魅力に富んだテーマである。わたくし自身この魅力にとらえられている一人であって、ここ一〇年ほど、くりかえしこのテーマについて考えかつ書きつづけてきた。それはむしろ一面では、文字どおりの現状分析として、すなわち日本や世界やいくつかの国やの現実の分析として具体化されたが、しかし他面、そういう分析のためにも、これまでの理論的仮説の批判的検討のうえに、自分なりの仮説を組みたててみるのが不可欠であった。時々必要と興味におうじて、そういう仮説の整備をこころみた論文も、いつの間にかかなりの数になってしまった。

本書をはじめは、こういう理論的仮説のためにつくられた論文のいくつかを、多少系統づけて集めることによって構成される予定であった。わたくし自身、こういう仮説がそれなりに完成されたとはけっして考えてはいないが、この辺で自分のこれまでの思考過程を整理してみるとともに、それを学界の批判に委ねることが、つぎの一步の前進のためにぜひ必要だと考えたからである。ところが、いざ集めて読みかえてみると、あまりに意に満たない点が多く、また断片的に書かれたものだけに、一方では重複が、また他方では欠落がいたずらに多いことも明らかになった。そこでけっきょく、わたくしのこれまでの思考過程をとりあえず整理するという目的だけのために、大半の部分を新たに書きおろす破目に陥ってしまった。それはわたくしにとって予想外に苦勞の多い仕

事であったが、ただ旧稿をならべるのよりははるかに得るところが多かったことも事実である。

こういうわけで、本書は、その第二章にかつて共著『日本資本主義の没落』Ⅲ（一九六三年）の第八章としておさめた旧稿のかなりの部分を、また第四章に『唯物史観』第四号（一九六七年）に発表した旧稿を、それぞれかなり筆を入れたうえで利用したほかは、すべて新たに書かれたものである。もともと付録の「ノート」は、一九六二年に『経済評論』第一巻第八号に発表され、のち東京大学社会科学研究所創立十五周年記念論文集『社会科学の諸問題』（一九六三年）に掲載されたものを、ほとんどそのまま転載している。これは、わたくしがこの問題について書いたもともとも早い論文であるという私情のほかに、その後たびたび多くのひとによって論評をくわえられたものなので、ここに収録しておいたほうが便利だと考えたからである。またそれは、本書全体についての鳥瞰を与える役も果すであろう。今後、この「ノート」だけでなく、本書全体が新たな論議の対象になり、それによってこの問題の研究がさらに発展するならば、著者としてこれほどうれしいことはない。終りに、『没落』の一部をこのように利用することについて快く諒承を与えられた共著者の大島清・加藤俊彦両教授、およびいつもながら万般の世話をして下さった東京大学出版会の石井和夫君に厚く感謝の意を表する。

一九七〇年一〇月

東京大学経済学部研究室にて

大 内 力

目次

はしがき

第一章 国家独占資本主義とは……………一

——問題の提起——

- 一 現代資本主義……………一
- 二 国家独占資本主義論……………二
- 三 国家独占資本主義へのアプローチ……………三
- 四 国家独占資本主義の腐朽性……………四
- 五 むすび……………五

第二章 国家独占資本主義の諸学説……………五

- 一 問題の提起……………五
- 二 国家独占資本主義の本質論……………五

——レーニンのばあい——



三	国家独占資本主義の本質論	一六〇
	——ベウズネルとツイーシャンク——	
四	国家独占資本主義の本質論	一六三
	——宇佐美・井上教授と今井教授——	
五	むすび	二一〇

第三章 国家独占資本主義の本質

一	全般的危機	二一五
二	恐慌と危機	二二七
三	国家独占資本主義の本質	二五〇

第四章 国家独占資本主義と恐慌

一	問題の所在	二六八
二	国家独占資本主義による恐慌の回復	二七二
三	恐慌の予防と国家独占資本主義	二八〇
四	国家独占資本主義と景気循環	二九七

第五章 国家独占資本主義の腐朽性

一	問題の所在	二〇六
二	レーニンの腐朽化論	二一
三	腐朽の経済的いみ	二九
四	腐朽の社会的いみ	二四九
付録	国家独占資本主義論ノート	二五

第一章 国家独占資本主義とは

—問題の提起—

一 現代資本主義

「資本主義は変った」としばしばいわれている。日本でこういうことが広く議論されるようになったのはここ十数年来のことであり、おそらくストレイチ^(一)だのガルブレイス^(二)だのの議論が紹介されたことがその契機であったように思われる。しかしこんにちともなれば、現代資本主義はもはやかつての資本主義ではないという認識はきわめて一般化しており、だれも疑いをさしはさまなくなっているといっている。

- (一) J. Strachey, *Contemporary Capitalism*, 1956. 関嘉彦・三宅正也訳『現代の資本主義』、一九五八年。
(二) J. K. Galbraith, *The Affluent Society*, 1958. 鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』、一九六〇年。

ところで、こういう「資本主義は変った」という議論は、これまで多くは、資本主義そのものはこれを擁護するという立場、あるいはいちおう社会主義を主張しながらも、資本主義の修正の可能性をみとめ、それをつうじて社会主義に接近することをはかるという立場からするものであった。したがって、とうぜんのことながら、「変った」点が問題にされるばあいには、よりのぞましい方

向への変化が強調されることになったのである。

そのばあい、どういう変化をとくに強調するかについては、むろんさまざまである。たとえば現代資本主義のもとでは失業問題が縮小ないし解消し、いわゆる完全雇用が達成されたことからはいまり、社会保障制度の充実によって福祉国家が実現した点を強調するひともある。また、同じことではあるが、ここでは所得革命がおこり、貧富の懸隔が小さくなって中産階級が増大し、他方における消費物資の生産のめざましい増加と相まって、豊かな社会が發展することを強調するひともある。景気変動がここでは小幅になり、恐慌がおこりえなくなつて、経済の安定成長が可能になった点をとくに重くみるひともあるし、一步すすめて、むしろ高度成長經濟を現代資本主義の成果と考へるひともある。さらに対外的には、帝國主義的植民地体制がくずれ、民族の自立が達成されたこと、そのいみでもはや帝國主義戦争は過去のものとなり、社会主義諸国の侵略さえなければ、恒久平和が可能になったと主張するひともある。

こういう主張がすべて資本主義をばら色に描きだしているといつたら、少々酷であろう。低開發国の開發がかならずしも順調でなく、そこにはいぜん貧困の問題が大量に存在し、餓死さえ日常化しているという点はしばらくおくとして、問題を高度工業化を達成した現代資本主義国にかぎるとしても、そこに**独占の弊害**、物価問題、豊富の反面としての頹廢、公害の多発等々、さまざまの問題が山積し、拡大しつつあることを、これらの論者もかならずしも否定するわけではない。しかし、そういう問題も現代資本主義の枠組のなかでやがては解決できると考えているかぎりにおいて、あ

るいは現代資本主義はそういう能力をもそなえるように「変った」し「変りつつある」と考える点において、やはりけっきょくは、資本主義にばら色のヴェールをかぶせているというべきなのである。

ところで、右のような諸変化なり、その反動として生じた諸現象なりが、のぞましいかのぞましくないかは、われわれにとつてはどうでもいいことである。それは各人の主観的な価値判断にまかせておけばたりのことであらう。しかし、このような変化そのものは、いわゆる現代資本主義論のなかで事実が完全に正確に把握されているかどうかには問題はのこるとしても、多かれすくなかれ客観的な事実としてわれわれのまえにあるのであり、しかもそれはわれわれに重大な学問的関心をよびおこさずにはいないものである。というのは、さきにあげたような諸変化は、一見したところマルクス以来マルクス経済学のなかで組み立てられてきた資本主義にたいする認識、ないしはマルクス経済学における資本主義像と、いちじるしく異り、背馳しているように思えるからである。

この点、そうくわしくここで論ずるまでもないことであらう。かんたんにいえば、たとえば失業の縮小、完全雇用の達成という点でも、それがこれまでマルクス経済学において『資本論』を基礎にしつつもたれてきた、相対的過剰人口の累積的拡大^(二)といったイメージといちじるしく背馳していることはいうまでもない。また、「豊かな社会」なり、中産階級の拡大なりといった点は、これも『資本論』に根をもつ窮乏化論と真正面からぶつかる事実といつていい。恐慌がもし完全に消滅し、景気変動自体がしだいに縮小するとすれば、恐慌は資本主義の基本的矛盾の周期的な爆発であり、

資本主義にとってさけることのできない、必然性をもった現象だというマルクス経済学の認識はくずれ去ることになるであろう。さらに資本主義のもとにおける経済の高度成長は、あるいはレーニンのいう、帝国主義の腐朽性、寄生性といった認識と矛盾するかもしれないし、植民地体制の崩壊は、これまた『帝国主義論』以来の、帝国主義列強による世界分割の必然性という理解とは斉合しえない内容をもっているのである。

(iii) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, (*Marx-Engels Werke*, Bd. 23, 1962), S. 657 ff. 向坂逸郎訳『資本論』第一巻、一九六七年、七八九頁以下。「産業予備軍の相対的大きさは、富の諸力とともに増大する。しかしまた、この予備軍が、現役労働者軍に比して大きくなればなるほど、その窮乏がその労働苦に逆比例する固定的過剰人口がますます大量となる。さいごに、労働階級の極貧層と産業予備軍とが大きくなればなるほど、公認の被救恤民もますます増大する。これが資本主義的蓄積の絶対的、一般的法則である。」(A. a. O., S. 673-674. 訳本、八〇八頁)

(iv) В. И. Ленин, *Империализм, как высшая стадия капитализма* (Сочинения, том. 22, 1952), стр. 262-271. 『帝国主義論』(『レーニン全集』第二巻、一九五七年)、三一八—三一九頁。なお、この点をめぐる論議として、大内秀明他「ハシンポジウム」現代帝国主義と『帝国主義論』(『月刊社会党』、一五八号、一九七〇年四月)をみよ。

もちろん、マルクス主義ないしマルクス経済学のこのような伝統的な認識と、「変った」資本主義の現実との乖離は、あるていどまではいわば両方からの修正によって埋めうるものかもしれない。両方というのは、一方ではいうまでもなく、マルクス経済学の理論ないし認識に弾力性をもたせるということであり、他方では現実の認識について、すくなくともその強調点を動かすということである。

ある。たとえば、相対的過剰人口の堆積にしても、それはほんらい『資本論』の論理体系のなかでは、景気変動にもなつてあらわれる労働人口の吸引と反撥という過程のなかで理解されればいいことであつて、マルクス自身、資本主義の発達とともに過剰人口がますます大量に堆積されていくと考へていたわけではけつしてないというような議論は前者の例である。また、こんなにちでも景気変動はけつしてなくなつてゐるわけではなく、恐慌という形で矛盾の解決ができなくなつた結果は、かえつて過剰資本の慢性的な滞留による経済の停滞とか、それを回避しようとすることから生ずるインフレーションの激化とか、異つた形で矛盾の深化がおこつてゐることをみのがすわけにはいかない、といつた議論は後者の例といえよう。

こういうところがまつたく無いみであるとはわれわれは考へないが、しかし他方、それだけではきわめて不十分であることもまた事実である。たしかに前者のような議論は『資本論』の論理が一貫性を欠いてゐる点をあらため、これを原理論の体系として純化させる点では大きな役割を果すであらう。それとともに、そういう純化された理論は、現代資本主義についても、その分析のための基本的な基準を与えるのであつて、けつして資本主義が「変つた」から『資本論』がもはや過去のものとなつたわけではないことも、明らかにするにちがいない。この点はたとえば『帝國主義論』になると、問題が原理論ではないだけに、もうすこし複雑なことになる。しかしここでも、レーニンの論理をさらに整理し、かれが個別的な事実の背後にみている帝國主義段階の資本主義の基本的な特質をさらに明確にしていくならば、それが現代の資本主義をも基本的に性格づけてゐること

を認識する手だてとなることは否定できないであろう。しかしここで基準といい、基本的な性格と
いうのは、きわめて抽象度の高い、いわば原則的なものであって、それだけで現代の資本主義の複
雑な様相が、またとくに、その「変った」点の本質なり必然性なりがすぐに解明できるわけではな
い。しばしば『資本論』なり『帝国主義論』なりの資本主義についての認識を、そのまま現実に適
用しようとすることによって、マルクス主義者が悪しき公式主義に陥るのは、いうまでもなく、こ
れらの古典にしめされた論理を純化する努力が不足しているためでもあるが、同時にそういう論理
の抽象の次元を不明確にしたままで、現実を一面的に割り切ろうとするためでもあるといっている。
そして、そのこととの関連でいえば、さきの後者のような議論は、「変った」現実のなかにも「変
らない」本質のあることを明らかにするといふいみでは、多少の有効性があるともいえよう。しか
しそのさい、その本質を強調せんがために現実をねじ曲げてしまうことは論外としても、「変った」
ことの必然性なり、作用なり、意義なりを明確にしないで、ただ「変らない」本質だけをぬきだし
て一面的に強調するのでは、やはり公式主義のそしりは免れないというしかない。すくなくとも
他方に「変った」現実がある以上、それは現代資本主義を総体としてとらえる点で成功したとはい
えないし、一面的である点では、好ましく「変った」点だけを強調するブルジョア・イデオログ
の議論と選ぶところはないのである。

このいみで現代資本主義を分析するために、マルクス経済学にも新しい武器を鍛えることが要請
されているようである。もちろんそれは、ブルジョア・イデオログのように、マルクスやレーニ

ンはもう古くなり、現実の解明には役立たないとしてこれを葬りさったうえで、新しい「理論」を組み立てようというのではない。したがってまた、新しい「理論」の名のもとに、現代資本主義のあれやこれやの現象をばらばらに切りはなし、表面的な現象記述をしたり、部分的に恣意的なモデルをつくって諸現象の関係を数式化したりすることが問題なのではない。われわれが新しい武器というときには、つぎのことをいみするのである。

周知のように一九世紀末、資本主義が帝国主義段階に到達することによって、資本主義にこれまでみられなかったような諸現象があらわれはじめたとき、あるいみでは現代と同じような問題にマルクス経済学は直面したのであった。すなわち、これまで『資本論』を中心に組み立てられてきた資本主義についての認識は妥当性を失ったという自覚があらわれ、そこから一方ではマルクス経済学の無力化・石女化を慨嘆するひとびとや、他方ではマルクス理論を安易に修正しようとするひとびとが立ちあらわれるようになったということ、これである。しかし、この前者からはむろん何も生れなかったし、後者も、もちろんいくつかの「変った」現象そのものを指摘する点では多少のいみがあったとしても、それを理論的に分析・解明するうえでは、やはり何ごとをもなしえなかったのである。こういう理論的破産を救ったのはいうまでもなく、ヒルファディングの『金融資本論』であり、つづいてはレーニンの『帝国主義論』であった。これらの書物が、『資本論』にたいする関係においてみずからをどのように位置づけようとしていたのか、その主観的意図は——とくにヒルファディングのばあい——かならずしも明確ではない。しかしすくなくとも結果からみれば、そ

れらがけつして『資本論』を放棄したり、えて勝手に修正したりするのではなく、むしろ『資本論』を基本的・一般的な原理としてふまえながら、新しい現象を解明するための理論を、そのうえにうちたてる役割を果たしたということは否定しえないことであろう。それは別の言葉でいえば、『資本論』を原理論として純化しつつ、あらためて段階論としての帝国主義論を構成することをいみずるものだったのである。

マルクス経済学が現代資本主義に直面することによつてもつ問題は、あるいみでこれと同様のものである。すなわちわれわれにとつては、これまでのマルクス経済学の理論を否認したり修正することが問題なのではなく、むしろそのうえに、現代資本主義にかんする新しい理論を構築することが問題なのである。

しかしそうはいつても、そこには大きな差のあることもまた事実である。というのは、『金融資本論』や『帝国主義論』のばあいには、上述のように原理論にたいして段階論を形づくることが問題であつた。そのさい、ヒルファディングやレーニンには、段階論の方法がかならずしも十分明らかになつていたとはいえないので、ヒルファディングのようにドイツの事実をいきなり一般的な規定にしてしまふとか、レーニンのように、いくつかの国の事実をやや便宜的にならべて、共通点を機械的に抽出するとかといった方法的歪みが入ることになつたことは否めないが、それにしてもそれらは、段階論として、資本主義の特定の段階の基本的な特質を一般的に明らかにするという課題を果したし、またそれでたりたのである。^(五)しかし現代資本主義を問題にするとすれば、たんに原理